

テーブルトーク

東京大学教授 西村 ^{ゆきお}幸夫さん (55)



東京都文京区で

愛されているのに、厄介もの扱い。この矛盾、何とかして！

そんな路地の現状と展望を、都市計画や防災の専門家、まちづくりに取り組む人たち20人と『路地からのまちづくり』（学芸出版社）にまとめた。「路地の可能性を探ることは、均質的で効率を追求した20世紀文明への異議申し立てに通じる」と話す。

路地は人を引きつける。路地歩きの催しがあちこちで開かれ、写真集も出た。テーマパークや居酒屋の内装にも路地的な空間が人気だ。一方で、車の通りやすさや防災を理由に、各地で幅の広い道路に作り替えられている。

福岡の生家は路地の奥。幼なじみと三角ベースに明け暮れた小さな空間が原点にある。「人間の大き

きさや歩く速さに合わせて作られた空間だから、そこに漂う生活臭や哀感さえも人をほっとさせる」

だが建築基準法は、道路を基本的に幅4m以上と定める。車を優先した近代の都市計画が背景にある。画一的な整備は、似たような町並みを生んだ。路地の復権には「多様なものを受け入れる社会づくりを」との思いも込めている。

「消防車が入れない」との批判は、必ずしも路地を壊す理由にならないと考える。「普段からの目

配りや助け合いなど、路地のコミュニティには減災の力がある。その魅力を生かしながら、災害に強い街をつくることはできる」

都市計画や景観計画が専門。今春にはフランス国立社会科学高等研究院で1カ月、日本とアジアの景観保全を講義した。「日本は伝統的な町並みも、建て替えて改良を重ねる。昔からの身体感覚を受け継ぎつつ変化もすることが、何百年も変わらない石造りの欧州では新鮮だったようです」（小川雪）

路地のやさしさ 文明への批評